

談話

第四週

富士山の話

こゝでは是非富士山の話をしなければならぬ云ふわけでは無いが、四季を通じてこの頃が一番晴れの日が多く、よい機会と思はれる。何かキツカケがある時なら猶よい。

例へば誰れか富士山のこゝを云ひ出すか、又はよく撮れた寫真をか繪があつて、衝立にでも貼つておいて二三日の後さかいふ場合。

元寇

わが國威を輝した外國との戦であるから、勇ましく、話してきかせる。元の國云つても、それが今この國であるかといふことは説明する必要はない。敵は元の名で終始すればいい。日本人の武勇や、神風については、力を入れて話しておいた方がいゝ。

一番と同じ。

犬と雀

これを読んだ時に、犬と友達になつた雀が犬の爲に大そう盡力する。利害を超えて徹底的に犬を助けるのに心を惹かれて、犬が又、いろ／＼の目に遇ふ筋も面白かつたので、こゝへ選んだ。

第八週

天狗と平助

内容は、日本昔話の中にある誰も知つてゐる話である。第五週の雨漏りと同じく、滑稽昔話で、可笑し味の溢れてゐるのが極上のいのちであらう。さうかする馬鹿聲の話のように可笑し味はあつても、いかにも品が悪くて用ひられないものが多いが、その中では内容が無難である。さすがに菊池寛氏が多くの昔話の中から童話讀本の中に採録された所以のものであり、又氏の筆のあらはし方は、吾々の學

ふによい書き方である。

よく考へて見るミ、先生ミ子供ミが一緒に聲をたて、笑ふミいふ場合は、さう多くあるものでは無い。製作ミか、觀察ミか、遊戯ミかの場合に笑つてはゐられない。まつ談話の折が最もよい機會であらう。何かにつけてユーモアの含まれてゐるのは、すべて事がなめらかに運ばれてよいので、お話の折には内容からでも、又は話方にでもこれを留意しなければならぬと思ふ。

第八週

栗 吟誦

小さな緑の家^{ウチ}があり

小さな緑の家の中に

小さな茶色の家があり

観 察

第四週

小さな茶色の家の中に

小さな黄色の家があり

小さな黄色の家の中に

小さな白い家があり

小さな白い家の中に

小さなころろがあつたさ

これは謎である、片カナで、黒板に書いておいて、みんな一緒に讀んで見る。この頃になるミ、しきりに字を讀みながら、一人で讀んでゐるのも見かける。

謎ミ云つてもたゞこれだけ讀んでゐるのではすぐわからないので、終りに小さく、「タリ」ミ添へ書きをしておく。そして、幾度もこれを繰り返してすつかり覺えてしまつてから、栗の中の小さなころろが何であるかを聞いて見たりする。

ふらふら